教 授　**大宮　勘一郎**　OHMIYA, Kanichiro

1. 略歴

1984 年 3 月　東京大学教養学部教養学科第 2・ドイツの文化と社会卒業
1986 年 3 月　東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士課程修了
1986 年　ロータリー財団奨学生としてドイツ連邦共和国ミュンヒェン大学留学（～1988 年）
1991 年 4 月　共立女子大学国際文化学部専任講師
1992 年　ドイツ学術交流会（DAAD）奨学金によりドイツ連邦共和国マンハイム大学留学（～1993 年）
1996 年 4 月　共立女子大学国際文化学部助教授
2001 年　アレクサンダー・フォン・フンボルト財団研究奨学金によりドイツ連邦共和国ベルリン自由大学研究滞在（～2002 年）
2002 年 4 月　慶應義塾大学文学部助教授
2005 年 4 月　慶應義塾大学文学部教授
2007 年 4 月　慶應義塾大学大学院文学研究科委員兼任
2011 年 4 月　東京大学文学部・大学院人文社会系研究科教授（現職）

2. 主な研究活動

a 専門分野

ドイツ近現代文学

b 研究課題

ヴァルター・ベンヤミン研究、ハインリッヒ・フォン・クライスト研究

c 概要と自己評価

ベンヤミン研究は、同時代の作家フーゴー・フォン・ホーフマンスタールやエルンスト・ユンガーらの、いわゆる保守革命運動との関係を考察する作業を進めている。科研費による研究プロジェクトに関しては、「情動と技術の人間学的考察」(2013～2015 年度)、「「抗争」言説の再検討（ドイツ文学の場合)」(2016～18 年度）に引き続き、「ドイツ文芸における「古典」概念の再検討」(2019 年度～）を進め、内外の研究者との議論を行っており、「国語」の規範性とその解体に関する論文が印刷中である。クライスト研究としては、編著『ハインリッヒ・フォン・クライスト―「政治的なるもの」をめぐる文学』(2020.3）を上梓し、導入、論文と重要論考の翻訳を掲載した。「双務的秩序」の喪失と回復の試みとしてドイツ文学を読み直す試みは継続中である。ドイツ・アカデミズムにおける「コミュニケーションの分断」状況、「ハビトゥス」論の歴史的位相論、および、いわゆる「経験美学」への批判的応答という題目で学会発表を三度行なっている。

d 主要業績

(1) 著書

大宮勘一郎（編著)、『ハインリッヒ・フォン・クライスト―「政治的なるもの」をめぐる文学』、インスクリプト社、2020.3

(2) 論文

大宮勘一郎、「ヘッセのアメリカ／アメリカのヘッセ」、『詩・言語』東京大学大学院人文社会系研究科ドイツ語ドイツ文学研究会編第 85 号、1-13 頁、2018.11

OMIYA, Kanichiro、「Auf der Brücke Wohnen-Über Heideggers Bauen und Wohnen nachdenken」、『Wohnen und Unterwegssein Interdisziplinäre Perspektiven auf west-östliche Raumfigurationen』、139-156 頁、2019.1

大宮勘一郎、「ドイツ再統一と政治的言説の変容―国民の「不一致的統合」とある学問的スキャンダル」、『断絶のコミュニケーション』、93-122 頁、2019.3

大宮勘一郎、「ペンテジレーア ―「政治的なるもの」と愛」、『ハインリッヒ・フォン・クライスト ―「政治的なるもの」をめぐる文学』、79−111 頁、2020.3

(3) 学会発表

国内、大宮勘一郎、「ドイツ再統一と政治的言説の変容―国民の「不一致的統合」とある学問的スキャンダル」、日本独文学会春季研究発表会、早稲田大学、2018.5.27

国際、OMIYA, Kanichiro、「Die Sprache der Toten. Die historische Dimension vom „Habitus"-Begriff und die „Pathosformel" bei Aby Warburg」、日本独文学会第 61 回文化ゼミナール、リゾートホテル蓼科、2019.3.21

国際、OMIYA, Kanichiro、「Einige kritische Anmerkungen zur empirischen Ästhetik」、Humboldt-Kolleg, Tokio 2019: Neuronale Geisteswissenschaften und empirische Ästhetik、東京大学駒場キャンパス、2019.5.19

(4) 啓蒙

大宮勘一郎、「ゲーテ『若きヴェルターの悩み』を読む」、『ヨーロッパ文学の読み方―近代篇』、77-91 頁、2019.3

大宮勘一郎、「トーマス・マン『トーニオ・クレーガー』を読む」、『ヨーロッパ文学の読み方―近代篇』、92-109 頁、2019.3

大宮勘一郎、「慣習としての生命／出来事としての生命―生命・生活・生存―」、『組織としての生命―生命の教養学 15』、慶應義塾大学出版会、2019

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、慶應義塾大学、「生命の教養学」、2018.6

招待講師、ゲーテ・インスティトゥート、「What ist Benjamin's "Passagen-Werk"?」、2019.5